# はじめに―もうひとつの沖縄戦

「「パティローマ」は、「南の果ての珊瑚の島」という意味さー。波照間（はてるま）島の語源らしい。ウスナー（沖縄本島）の南の端にあるから、そんな名前がついたんだろうなぁ。でもよ、僕らは波照間のことを「ベスマー」（私たちの生まれた島）と呼ぶさーね」

波照間島の人たちからそう教わったのは、10年前のことだ。彼らが喋る島の言葉「ベスマムニ」と初めて出合ったのもこの時だった。日本語とは全く違う響きに、私は一瞬で魅了された。

東京から南西へ約２０００キロ。沖縄本島から約４６０キロ海を越えた先、荒波の狭間にぽっかりと浮かぶ孤島。波照間島は日本最南端の有人島だ。

一周約15キロの小さな島をぐるりと囲むサンゴ礁。その水面は亜熱帯の太陽をうけて燦々と輝いている。覗き込めば、翡翠（ヒスイ）やターコイズなどの宝石を砕いて溶かしたような海水の中で、赤や黄色の魚たちがゆうゆうと泳ぐ。島内を歩けば、延々と広がる緑のサトウキビ畑。その中で、三角形のクバ笠をかぶったお年寄りたちが収穫に追われている。ザク、ザク、ザク。ザク、ザク、ザク……。鎌を振るう心地よいリズムにのせて、サトウキビが切り倒されていく。

島の主要産業・サトウキビの収穫が最盛期を迎えた頃、この島の風はどこか甘い香りになる。黒糖と潮風の香りだ。

人口わずか５００人あまりが暮らすこの島は、私が学生時代に8か月間暮らした「心の故郷」であり、ジャーナリストとしての「原点」の島だ。

２０１０（平成22）年春、ジャーナリストを目指して東京の大学院で学んでいた私は、初めて波照間島を取材で訪れた。ある事件の真相を追うためだ。

１９４５（昭和20）年、沖縄戦の最中、当時の全人口の3分の1にあたる５５２人が死亡した。原因は戦闘ではなかった。熱病・マラリアだ。蚊が媒介する恐ろしい感染症である。

戦時中、米軍が上陸せず、地上戦もなかった波照間島では、空襲など直接的戦闘による犠牲者はゼロだった。それなのに、なぜ大勢の住民たちがマラリアで病死したのか。調べてみると、それは、住民たちがマラリアの蔓延する西表（いりおもて）島のジャングル地帯へと移住させられたことが原因だった。しかも、日本軍の命令によって、強制的に。

軍命による強制移住、それが引き起こしたマラリアによる病死。これが沖縄で「もうひとつの沖縄戦」と呼ばれてきた「戦争マラリア」だ。

戦争マラリアは、波照間島をはじめ、石垣島や黒島など八重山諸島（列島）全域で起きた。犠牲者は３６００人以上にものぼっていた。中でも最も深刻な被害を受けたのが、波照間島だった。

波照間島。平坦な大地にサトウキビ畑が一面に広がる

私が戦争マラリアを追い始めた２０１０年は、沖縄戦から65年の歳月が過ぎていた。体験者たちの証言を伝え残せるのは、今が最後の機会なのではないか。ならば、映像で彼らの肉声をきちんと記録したい。そんな思いで一人、ビデオカメラを抱えてやってきた私に、戦争体験を気軽に話してくれる人などいなかった。

「思い出したくもない」

「他を訪ねてくれ」

玄関口で断られることも多々あった。

それもそのはずである。大事な家族を亡くした体験を、突然やってきた見ず知らずの若僧に気軽に話すことなど、誰ができるだろうか。

「もし私が戦争体験者で、取材される側にいたら、どうして欲しいだろうか……」

そう考えると、やるべきことは明確になった。

現場に腰を据えて取材をする。それも体験者たちとひとつ屋根の下で衣食住を共にしながら、人間関係を作りながら取材をする必要があると思った。最も被害が大きかった波照間島に住もうと思った。大学院に1年間の休学届けを出し、東京を後にしたのは２０１０年の冬、年の瀬が迫る頃だった。私はまもなく24歳になろうとしていた。

島には、親戚も知り合いも誰もなかった。身寄りのない私を自宅に受け入れてくれたのが、浦仲家の浩さん、孝子さん夫妻だった。

孝子さん（取材当時79）は13歳の頃に戦争マラリアを経験し、両親を含む家族のほとんどをマラリアで亡くしていた。

生き残ったのは孝子さんと4歳年下の妹・利子さんの幼い姉妹二人だけだった。後継のいなくなった浦仲家を断絶させてはならないと、戦後、浦仲家に婿養子に入り、孝子さんを支えてきたのが夫の浩さん（取材当時87）だった。公民館長や町議会議員として島の発展に尽力してきたリーダーだ。

島で生まれ育った老夫婦の元に、ある日突然、ビデオカメラを抱えて転がり込んできた千葉県出身の学生。不思議な3人暮らしが始まった。

浦仲夫妻はサトウキビ農家だった。島の人たちの戦争体験を聞くならば、私自身も島の人たちの生活の営みを体験せねばと思った。浦仲夫妻と毎日一緒にサトウキビ畑で鎌を振り、汗を流し、キビを刈り続けた。人生で初めて経験する農家の生活は、過酷の一言に尽きた。夜になれば、島の新鮮な食材が並ぶ食卓を囲んで労をねぎらい、休日は島の人たちと三線を奏でた。淡々とした日常の中で、当初、「戦争体験者」「証言者」と呼んでいた人たちを、「おじい、おばあ」と呼ぶようになった。

最初は全く理解できなかった島の言葉「ベスマムニ」も、3か月もすれば次第に分かるようになった。

「おじい、おばあ」という呼び名も、やがて島の言葉で「ブヤー（おじい）」「パー（おばあ）」

と呼ぶようになった頃、「ウランゲーヌアマンタマ（浦仲家の女の子）」と、私は島の人たちから呼ばれるようになった。

人々と寝食を共にし、島の文化に溶け込み、ゆっくりと取材を重ねていくなかで、当初「戦争マラリア体験者の肉声を伝え残す」と張り切っていた私の心は柔らかくこねられていった。戦争マラリアを生き抜いた人々の「人生」を見つめるようになった。

ブヤー、パーたちとお茶を飲みながら、あるいは畑仕事の合間に一緒にお菓子を食べながら、ふとした瞬間に「マラリアぬ時よぅ、でーじやったどぁ（マラリアの時、大変だったよ）」と彼らが語り始める証言に耳を傾け、ビデオカメラを回していった。

こうして完成したドキュメンタリーをもって私は大学院を卒業し、２０１２（平成24）年春、沖縄の民間テレビ局・琉球朝日放送に就職した。報道記者として米軍基地問題や自衛隊問題、米軍がらみの事件事故などの現場取材に明け暮れた。

「ハナ、私と一緒に沖縄戦のドキュメンタリー映画を作ろう」

映画監督の三上智恵さんからそんな提案をいただいたのは、２０１７（平成29）年春のことだった。

私はテレビ局を退社し、フリーランスジャーナリストに転身したばかりだった。テレビ局でドキュメンタリー番組を制作した経験はあったが、突然の映画制作の提案に驚いた。

しかもテーマは、沖縄戦だ。



「沖縄を原点とする私たちが手をとれば、他にない映画ができるはずだから。それに、戦争マラリアの取材ができるのは、ハナしかいないから」

そんな三上さんの言葉に背中を押された。

三上さんと私は、同じ沖縄のテレビ局で働いた先輩後輩の間柄だ。『標的の村』などの番組を制作してきた三上さんと、報道記者として現場を取材してきた私がタッグを組み、10か月間の製作期間を駆け抜けて、２０１８年7月、ドキュメンタリー映画『沖縄スパイ戦史』が完成した。

沖縄・桜坂劇場での公開を皮切りに、東京、大阪をはじめ全国各地で上映が続き、これまで約3万人の観客が劇場に駆けつけてくれた。２０１９年10月の山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映されたほか、韓国、ドイツ、スイス、米国など海外でも上映された。キネマ旬報ベスト・テン文化映画部門1位（２０１８年）、文化庁映画賞など9つもの賞をいただいた。

１９４５年3月～6月の沖縄戦では、沖縄本島中南部を主戦場として日米両軍による激しい地上戦が展開され、軍民合わせて約20万人が死亡した。一般住民は砲弾が飛び交う戦闘に巻き込まれ、沖縄県民の4人に1人が死亡する甚大な被害を受けた。それがこれまで一般的に語られてきた沖縄戦である。これを「表の戦争」とするならば、『沖縄スパイ戦史』が描いたのは、その背後で展開された裏の戦争、つまり「秘密戦」だ。

日本軍がどのように住民たちを作戦に利用し、時に武器を持って戦わせ、そして住民たちが軍にとって「不都合な存在」となった時、一体何が起きたのか。戦後これまで語られてこな

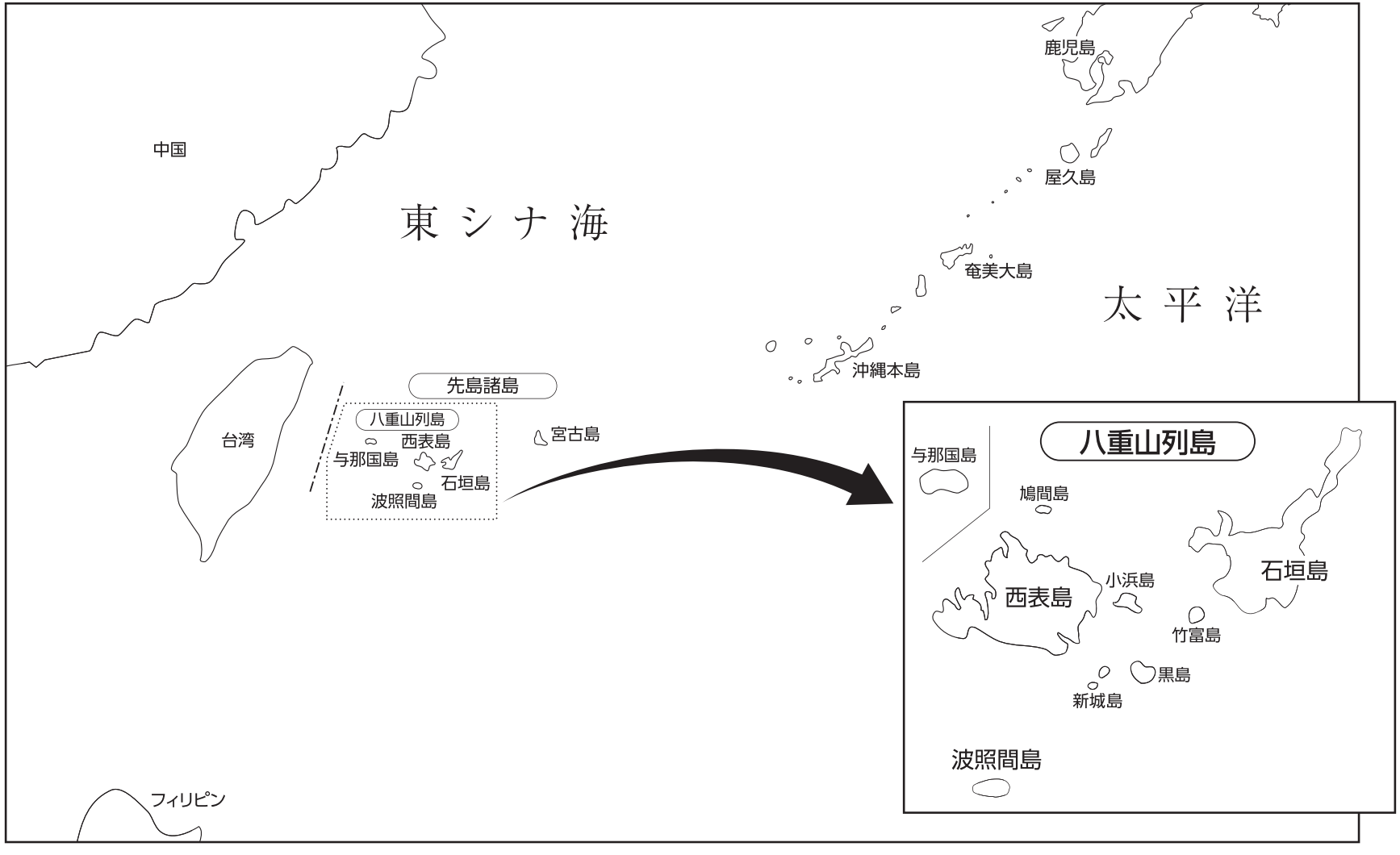
かった沖縄戦の最も深い闇を「スパイ」というキーワードで描いた。これこそが沖縄戦の悲劇であり、日本軍が展開した真の作戦であり、その中にマラリア有病地へと移住させられた波照間島の人々も飲み込まれていた。

この本は、私が戦争マラリアを追い始めた学生時代から『沖縄スパイ戦史』の制作に至るまでの10年間の記録だ。学生時代に波照間島、石垣島、西表島など八重山諸島のあちこちを歩いて取材しながら毎日、大学ノートに書き綴った取材記録は20冊以上にのぼっていた。その中には、辛い体験を語ってくれたブヤー、パーたちの言葉が散りばめられていた。「なぜ、今、戦争マラリアを取材するのか」「誰のために、何の目的で、私は取材をするのか」と悩みながらカメラを回し、ジャーナリストの卵として歩き始めた等身大の私がいた。

そして、過去の戦争マラリアから現在へと繋がる「一本のレール」が見え始めた時、どうしても今、この本を書かねばならないと思った。

取材を始めた当時のことを思い出そうと、脳裏に最初によみがえってくるのはアブラゼミの鳴き声だ。1匹ではない。無数の蝉が一斉に発する声だ。それは次第に大きく、甲高くなっていき、やがて耳をつんざくほどの叫び声に変わる。すると、私の思考は過去へと誘われ、目前にはあの鬱蒼としたジャングルが現われる。

２０１０（平成22）年6月21日。あの日、私は石垣島の山の中にいた。


中国
東シナ海
鹿児島
屋久島
奄美大島
太平洋
沖縄本島
台湾
先島諸島
八重山列島
西表島
与那国島
石垣島
波照間島
宮古島
フィリピン
八重山列島
与那国島
鳩間島
小浜島
西表島
石垣島
竹富島
黒島
新城島
波照間島